

第三百二十二回 青葉会

平成二十五年正月五日(土) 初芝居総見・新橋演舞場(昼の部)
一月二十四日(木) 初句会・丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子

豊田ゆたか 中野一灯 山崎亜也

石川清 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 南平和夫

宮内規雄 山内天牛 渡邊盛雄

赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明 村田くに子 山崎青史

山内天牛 山本三恵

ゴシックは撰者の天

《選者吟》 永別や賀詞を交して三日後に

家事なべて応用問題七日粥

代替り年始回りの甥や姪

トネルの渋滞解かれ夕斑雪

曾孫の数を聞き合ふ女正月

万里子 (猛・弘)

全 (弘・青)

全 (敏)

全

全

《互選句》

七点 ☆ 三番叟差す手引く手の淑気かな

六点 ☆ 地震(なる)の海より大いなる初日の出

五点 ☆ 床に伏す妻に七草粥の盆

☆ 角巻や訛りくぐもる朝市女

☆ 余生には流儀なぞなし枯木立

☆ 山荘の炉辺ひとり碁の石の音

「戻り橋」

寒の入り鬼女が虚空に消えて行く

黒豆のつゆ効験あれ初うたひ

(喉にいい虫)

吹雪くなか晴着姿に護謨(ゴム)の靴

(成人の日)

菊之助の大関・明石志賀之助

声冴えて句(こほ)はんばかり銀杏髪

バツハ聴くりハビリ室に冬の汗

おみくじは小吉ばかり初詣

寒雷や眼の透ける般若面

(正：中七↓「和室の壁に」では?)

大寒や長くハグして別れけり

(正：中七下五↓「別れの前の長きハグ」では?)

人数多(あまた)異郷に果つや虎落笛

日めくりのはや六の日となりにけり

☆ 全学連絶え寒灯の時計台

(正：上五中七↓「寒灯や全学連の」では?)

春近しイコンに揺るる燭の影

人日や子よりも若き執刀医

(七日手術され十六日無事退院されました)

雪の朝診察台の無精髭

正月の行事や児等の丈計り

「休爛中」寒中見舞い届きをり

紀久男 (そ・灯・く)

全 (そ・灯・く)

猛 (隆・亜・天)

孤舟 (ゆ・正・三)

五郎太 (弘・正・亜)

健介 (恭・ゆ・三)

ゆたか (堅・孤・隆)

一灯 (万・恭・正)

全 (五・允・三)

天牛 (弘・隆・青)

全 (紀・弘・龍)

そらお (龍・正)

紀久男 (猛・三)

二点

☆年の酒詩友の快気祈りつつ

紀久男 (万・隆)

落葉道陽の温もりを背に受けて

猛 (灯・允)

子離れや夫婦二人の大晦日

忠彦 (そ・紀)

ポインセチアわがたましいに色あらば

孤舟 (敏・隆)

生誕も死もただひとり寒昂

全 (堅・く)

双六や恋に落ちるにあと何目(め)

弘子 (孤・五)

☆教会へ駅へ別るる十二月

全 (万・く)

勘三郎良き子遺せり初芝居

恵洲 (紀・弘)

句友の差し入れにあずかりて

ゆたか (紀・正)

幕間にいたたく鯛焼ぬくみあり

一灯 (允・青)

(青：うら淋しい光景。テレビの鬼平の一場面を思わせます)

田作りの付かず離れず人の世も

正明 (猛・龍)

辛夷の芽肩の力を抜きなさい

全 (紀・天)

激痛去り我が身解けゆく冬の朝

規雄 (そ・紀)

白味噌の雑煮に芹の緑一點

亜也 (猛・ゆ)

☆浮子見つめ暫し懐炉を握り締む

全 (万・天)

乳飲児を囲みにぎわう新年会

そらお (隆)

初稽古柿落(こけらおとし)しに力入る

紀久男 (く)

わが脚を凍てる初雪もて弄(あそぶ)

猛 (堅)

成田屋のゆかりの寺へ初詣

全 (正)

首都の雪てんやわんやの大騒ぎ

全 (青)

☆枯櫛電飾乗せて甦る

全 (隆)

寒の冷えこの老骨に容赦せず

全 (万)

初雪や天から供花(くげ)一周忌

忠彦 (恭)

☆ブーメランの風花連れ戻す

孤舟 (万)

焚き合はす大根少し甘くなり

五郎太 (猛)

たつぷりと虎見て寒の日暮れかな

弘子 (五)

数センチ都会の雪の恐さかな

健介 (龍)

新歌舞伎座工事現場も日脚伸び

恵洲 (く)

鏡餅少しひび割れ演舞場

ゆたか (天)

歌がるた子供お手付き恋の札

全 (垂)

(☆：「き」↓「く」)

メビウスの帯のごとくに去年今年

昇 (五)

相模川東大雪西は雨

和夫 (龍)

(龍：下五↓「西小雨」では駄目？小雨が好きならもん

亜也 (青)

小正月女子の所望で肉料理

天牛 (龍)

(青：女正月だから女子の言うことをきくのは仕方が

？ (三)

車事故以外死なぬと賀状来る

？ (青)

絨毯の擦れ出づ芯地や化けの皮

？ (青)

新年会眼下に東京駅新た

？ (青)

●次回青葉会

二月二十八日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

三月二十八日(木)

四月二十五日(木)

平成二十五年一月句会報

一 当会吉例・初芝居総見は新橋演舞場・昼の部。先生や由美子さん、三恵さんら12名参加。雀右衛門一周忌追善「吃又(どもまた)」(吉右衛門・芝雀ら)が一番。次いで「車引」(三津五郎ら)が見物(みもの)でした。初句会最高得点の恵洲さんが詠んだ「三番叟(さんばそう)」(梅玉・魁春・我富ら)は正月らしい御祝儀舞踊。四句の正明さんが詠んだ「戻り橋」(幸四郎・福助ら)は菊五郎系の舞踊劇ですがいまひとつでした。夜の部の「七段目」由良之助役の團十郎は肺炎の恐れで昨年12月中旬の南座以来の病休。新歌舞伎座柿落(こけらおとし)を四月に控えた斯界に暗い影を漂わせ松の内の目出たい気分を吹き飛ばしました。総見常連の天牛さん、恭延さん不在も落着きの悪い気分になった要因です。

二 句会始まる前の午後4時から庄司龍平さん囲んで歓談：細井和男さん、尾上貞明さん、恵洲さんら7名。この会合も数年前から恒例となり、つい飲み過ぎて仕舞ます。ビール中心に小生持参の「張鶴・雪」一升壘(新潟・村上)飲み乍ら話が弾みました。

初句会は久しぶりの孤舟さん、そらおさんら11名。投句も11名。先生お手製のつまみ(チヂミ)弘子さんからのCRISPYのチョコ(スカイツリーの形)。「麒麟」(新潟・津川)6合、一灯さんからの「女城主」生吟醸(岐阜・恵那)、亜也さんからの「大信州・仕込十五号」純米大吟醸生酒(松本)と美禄が揃い当会らしい盛り上りとなりました。話題はアルジェリア関連とお仲間間の病状(天牛さん、恭延さん、清さん、和夫さん：悪化再入院、正明さん、猛さん、規雄さん、忠彦さん)でした。

三 関係者近詠

早天を雀らと舞ふ初黄葉 万里子 大根旨しとるると舌鳴らす 規雄
また好きな老優が逝き秋暑し 全 木の実降る音を肴のウオツカかな 無聞齋
まうゐいないニホンカハウソ瀬祭忌 全 筆談のいつしか訛る夜長かな 丹野敦雄
癒え著し秋夕焼へ一万歩 全 杉山に鈍き日の差す寒の入 全 全
秋田から一莢三粒の月見豆 全 人影も鳥影も無き冬田かな 全 全
残り蚊の腹膨れ切り吾が腕に 全 重力に歪みありけり初鏡 全 青史
空を切る野分の音や床の中 恭延 読初やうたかたかつ消えかつ結び 全 全
――「萬緑」1月号―― 絵に画いた虎が飛び出す鱈起し 正明
嵐去り断捨離初日涼新た 万里子 残雪に足取られさう病み上り 恭延
黒猫へ真赤な実降るゴーヤ棚 全 織月の梢に光る寒さかな 允章
残り蚊の刺す速さ吸ふしつこさよ 全 杉山に鈍き日の差す寒の入 全 全
今日の糧硬貨で足れり石路の花 眞希子 人影も鳥影も無き冬田かな 全 全
冬の道パンク自転車連れ帰る 全 読初やうたかたかつ消えかつ結び 全 全
ノツクのみにて去る贈り人冬菫 全 交番の巡査二人の年用意 堂哉
淋しさの中へ蓑虫揺れてみる 弘子 牡蠣食めば雨驟りけりセーヌ畔 龍平
うっかりと竜の玉踏む寺領林 全 初空や一湾領す鳶の笛 允章
人触れしもの流れつく冬の浜 全 已んぬる哉又も入院年の暮 規雄
大根を買ひに京都の市電かな 和夫 地中より侏儒の蜂起か霜柱 孤舟
凧やお好み焼きかたこ焼きか 全 健やかが何より宝年迎ふ 弘子
菊膾紫色とはもつてのほか 忠彦 霜柱子らに交じはり踏みし朝 五郎太
渡り鴨水飲み鳥の仕草せり 全 寒晴や三津五郎弔辞切々と 紀久男

仁左衛門休演 紀久男 年酒酌む成田屋快気祈念して 全
霜月やお目あて居らぬ演舞場 規雄 昼酒や牡蠣食はんと中野路地 全
――「萬緑」2月号―― 亡妻の四十九日や小春空 規雄 去年今年ここに点す面輪かな 新居齋
河原四郎

● 川柳 「久し振り！名前出ぬ促じやあ又な！」 長岡賢次郎 雑煮食ふワインの白と今風に 河原四郎
年賀状に「老いと寄り添い病と付き合うのも人生の内ですかね！？」とありました。二月三日早朝74歳で御逝去。

二月三日

紀久男記